石松久幸
Hisayuki Ishimatsu

バークレークラブ

Club & Crab

PMC出版

バークレー
クラブ

PMC出版

著者略歴

東京生まれ。1972年慶応義塾大学文学部卒業後渡米。1974年メリーランド大学大学院（修士）図書館情報サービス学部卒業。現在，カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館日本課に勤務。

バークレークラブ

発　行――――初版　1991年2月8日

定　価――――1957円（本体価格1900円）

著　者――――石松　久幸
Hisayuki Ishimatsu ©

発行者――――今井和久

発行所――――ＰＭＣ出版株式会社
〒102 東京都千代田区飯田橋4―4―5
電話 (03)3264-5774　振替（東京）5-104372

組　版――――正美印刷所

印　刷――――小用印刷所

製　本――――イマヰ製本所

ISBN4-89368-134-6　C0090　P1957E

＊乱丁・落丁本はおとりかえ致します。

バークレー クラブ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

☆目次

猫好き人種　7
蟹獲り裁判　47
ニッポン人生態学　97
愛しの釣り師たち　121
アメリカ軟式野球狂　147
ヌーディスト・ビーチにて　195
自由の街角　213
おじさん三人漂流記　233
☆エピローグ　305

バークレーにはたくさんの日本人がいます。蟹（クラブ）みたいにブツブツ口から泡を吹きながら横這いしている人たちがほとんどです。もちろんなかには功なり財なして成功した人もいます。でも、ほとんどの人達は、泡を吹きながら横這いの毎日です。

日本へ行くと決まって「マイッタ、マイッタ」と言いながら帰ってきます。故郷に錦を飾ろうと思って時たま日本に帰るのですが、「円高」の今日このごろです。なかなか、そう問屋は卸してくれません。

「オレが日本を出たころは一ドルは二八〇円だったのに……」

けれどもこちらに長く住めば住むほど円はますます高くなってしまうようです。親への仕送りもままなりません。

「日本もいいけれど、住みやすさでは断然カリフォルニアだよな」

ブツブツと泡を吹きながら、カリフォルニアの青い空をみて、せめて溜め息をつくのが関の山、そしてまた一所懸命明日を生き続けるしかありません。

私は自分のまわりにウョウョいるそんな日本人の友達が大好きです。なぜなら私も「バークレーの蟹」のうちの一匹なのですから。

……ここまで前書きを書きあげたところに、東京の編集の人から国際電話がありました。この人はこの本のタイトルをさんざん苦労して考えだしてくれたありがたいお人なのです。「早く前書きを書いてファックスしてくれ」という催促の電話です。私は待ってましたとばかり、書きたての前書きをファックスしました。するとおりかえし東京から電話です。

私は受話器をとってガクゼンとしました。

「エエッ！　クラブって蟹のことではなかったの？」

「バークレーの仲良し倶楽部のことですよ」

日米コミュニケーションギャップの渦中にいる私は、当分ここから抜け出られそうにもありません。

猫好き人種

下村さんという友達がいて、空手の先生をしている。固太りで色は黒い。顔は誰が見ても美男子とは言いがたい。どちらかといえば、縦よりも横のほうが長いようながっしりした顔をしている。その中心に空手の猛稽古のために少々つぶれぎみの鼻がある。唇は厚く、たくましく、なんでも呑み込めそうである。足もそれほど長くはない。

よく見ると実にやさしい目をしている。おなかの出っ張りぐあいもなんとなくあたたかさを感じさせる。無駄口はたたかない。男っぽい男である。

外見にとらわれず男の価値とは何かを知っている女性には下村さんの良さがよくわかるはずである。私の妻なども下村さんを、「いい人」と高く買っている。

いまでもフンドシを愛用する豪傑である。でも、残念ながら近ごろこういう男の価値がわかる女性が少なくなったのか、どうも異性に縁がない。そのため、男、下村三八歳はまだ独身である。薄化粧をしたカワイイ美少年がもてはやされる時代である。一概に彼のみを責めるわけにはいかない。けれども、彼にも責任はいくらかある。異性に縁がないくせに、女好きにかけては人一倍で、やる気満々なのだ。予備タンクを持っていそうなほどたまっている。時どき電話がかかってきては、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ああ、やりたい、やりたい」
と、あたかも受験勉強するために友達の下宿に泊まりこんでは品の悪い雑誌を読んで悶々としている予備校生のように鬱屈した精力に悩んでいる。だからあまりにもたまりすぎて、たまにデートをすると抑制がきかなくなるようだ。
このあいだ、久し振りにデートするといって喜んで電話がかかってきた。
「今度のデート、どこゆくの?」
と訊ねると、
「そうだね、日本町の朝鮮料理屋へ行って焼き肉でも食べようかと思ってる」
バカ、初めてのデートで朝鮮料理屋に連れて行くやつなんているか! 第一、彼女の服が焼き肉の煙でくさくなるだけで嫌われるではないか。
「アーア、わたしのお洋服……この人はなんて、思い遣りのない人だろう」
それにテーブルの上にズラーと並べられるキムチの皿々。
「それで精力つけるつもりだろうけど、ニンニクのムンムンするやつに誰がキスする気になるものか、やめやめ!」
「そーお、じゃあどこへ連れて行こうかなあ」
「行くならまずトップ・オブ・ザ・マークへ行って軽く一杯。ゴールデン・ゲートに入ってくる夕方の霧を静かに眺める。食事はフィッシャーマンズ・ワーフの東京スキヤキがきれいでいい。畳の個室があるから予約を入れておくこと。まず、軽くサシミからはじめる。小物をいくつか並べて、

それを肴に酒をのむ。それからテンプラ。最後にちゃわんむし」
そのころには、彼女も堅さがほぐれてくる。
「バーもいいけれど、日本人にはやっぱり畳がいいですね」
なんて言いながらのんびり話をすればいい。
「東京スキヤキを出たらケーブルカーに乗って夜のサン・フランシスコの坂を上下し、ユニオン・スクエアーのセント・フランシス・ホテルにゆく。ロビーを入ったすぐ左にあるバーがいい。アンチークの家具は落ち着いたムードだし、なにしろ一九四〇年代アメリカ絶好調時代のナツメロをバンドがいい感じでやっている。そこでダンスをすればいい。なに、空手の先生だってダンスぐらいすぐできるよ。スローな曲ばかりだから蟹の横這い式のでやればいい。チークだよ、チーク。まわりを見渡してもみんなチークだもの、簡単だよ。そのあとはもう二人におまかせ」
せっかく友達がいろいろ教えてあげるのに、いつもどうもうまくいかない。それで、いまも独身。
下村さんは佐賀県の出身で水産高校に在学中、実習でマグロ漁船に乗り込んだが、船酔いばかりしていたため漁師になる夢を断念し警察官となった。このあいだに、もの心ついたときからお祖父さんに教えられた空手に磨きをかけ、高校、警察でも精進を続け空手の下村として九州で有名になった。
ある日、いつものように下村巡査は白いペンキを塗った自転車をこいで、南国九州の青い青い空の下を、
「どこかに、いいおんな、いないかなあ」

と内心期待しながらパトロール勤務についていた。場所は、とある米軍基地のすぐ横。ふと見ると、近くの草むらがガサガサと揺れている。その揺れの不自然さに気がついた下村巡査、つかつかと近づくと、突然下半身はだかのアメリカ人がいきなりなぐりかかってきた。そこは下村巡査、この世に生を受けてから二三年間空手一途に励んできた実績がある。軽くかわしてこの巨漢に当て身を一発。大男はその一撃でのびてしまった。

この事件がある意味で下村巡査の一生を左右することになるとは本人もそのときは気がつかなかった。幸か不幸か、そのアメリカ人は基地所属の兵隊で日本人の売春婦といかがわしい行為をやっていたのだが、いずれにせよ下村巡査は司令官付のミリタリー・プロセキューターから呼び出しをくった。

プロセキューターは、

「この男は金タマを三つ持っているような色気違いで、いつも地元の警察といざこざをおこしていたやっかい者だ。しかし日本の警察はこわがってなかなか骨のある処置をしないので図に乗ってやりたい放題だった。われわれとしても困っていたところだ。貴官はそれを実に見事にやっつけてくれた」

と手放しでほめてくれた。

「そこでだ、貴官に頼みがある。当基地内でも最近規律の乱れから犯罪がふえる傾向にある。あいにくわがアメリカ合衆国は最近の世論に押され軍事費の削減につぐ削減で、とくに治安をあずかるMPに対する予算カットには当方も頭を痛めているのが現状である。当然基地内に住む軍人の家族

から武道（マーシャ・アーツ）を習いたいという要望がでている。これらは主に夫人連中や子供達だが、どうだね、ひとつ教えてくれないか」

下村巡査は「子供」はどうでもよかったのだが、「夫人連中」という一言にふたつ返事でオーケーした。これが下村さんがアメリカに来るようになったきっかけである。

いま、下村さんはサン・フランシスコの南、サン・ホセ郊外で道場をかまえ、門弟数百人を数える空手の先生である。またその名はアメリカだけでなく世界各地に広まりジェット機でフロリダへ行ったりヨルダンへ行ったり、ジャマイカへ行ったりして講演や実演をしている。だけど、実力はそこらの偽空手教授とは段違いで、たしかに一流なのだけれど、金儲けのほうは実に下手。相変わらず道場に寝泊まりして自炊生活。勿論、独身だから、その生活は実にわびしいものである。誰か下村先生の妻兼マネジャーになってくれませんか？

その下村先生、ハーフ・ムーン・ベイという太平洋側の小さな町へ行き、そこで砂浜を走ったり、山をかけめぐったりして自己トレーニングをするのを常としている。ある日、いつものように山に入ろうとすると、山の麓の一軒家からおばあさんが出てきてこう言った。

「若い人よ、あそこの木の下に母猫と子猫が三匹捨てられている。わたしには捕まえることができない。ついてはヤングマン、あなた、捕まえてくれないか」

下村先生、もともとやさしい性格だから猫も好き。現在も一匹飼っているが一匹ではなにかさみしそう、子猫でも連れて帰ればいい友達になるかもしれない、そう思って、猫捕りをはじめた。ところがこれら四匹の猫、いずれ劣らずみな逃げるのが早い。息を切らしてやっとの思いで子猫を一

匹だけ捕まえることができた。
しかしこの子猫、どうもふつうの猫と様子が違う。家（道場）に連れて帰り、いままで飼っていた大人の猫と初対面。大人のほうは、
「フーッ」
とかやって、
「ここはオレの縄張りだ、大きな顔するんじゃねえ」
と息まいているのにまったく無視。逃げもしなければ、隠れもしない。体は普通の子猫と同じように小さいのに、大きな大人の猫に対していかにも堂々としている。食事時は大人の猫と同じ器から食べる。ふつうの猫なら、大人の猫に脅かされればとてもじゃないが一緒の器からなんて食べない。ところがこの子猫は、逆に大人の猫が食べようとして頭を突っ込んでくると前足でその頭を押さえこんでしまい食べさせない。大人の猫はすっかり面子を失ってもう文句を言う元気もない様子なのである。
そればかりではない。下村先生、この猫と同居するようになって間もなく、とてつもないことに気がついた。
下村先生は道場の二階にベッドをおいて寝泊まりしている。二階の寝室から階下の道場に吹き抜けになっているのであるが、この子猫はその二階から階下に行くのになんと階段を使わず、直接飛び降りてしまうのだ。これには下村先生も肝をつぶした。それから気をつけてよく観察していくうちにいろいろとおかしなことに気がついた。とにかくこの子猫はなにをするにも他の子猫とはくら

べものにならないほど敏捷なのである。下村先生、ついに電話をとって友人達の意見を聞くことにした。

「色は何色なの？」

「こげ茶と茶色のちょっと縞模様」

「耳のてっぺん、とんがっていない？」

「ちょっとね……」

「下村さん、それは、山ネコのこどもですよ」

友人はそう答えた。

試みに図鑑で調べると、ボブキャットに違いないらしい。

「そのうち、キバがニョキニョキ生えてきて、ライオンみたいにグワーッと吠え、毎日生肉をやらないと下村先生の首っ玉にかじりつきますよ」

カリフォルニアのこのあたりにもボブキャットが多いのである。下村先生は山猫を抱いて頭をかかえた。

「下村先生、それはね、以前殺した子猫の生まれ変わりですから大事にしてあげなければいけませんよ」

そう忠告する友人もいた。以前に殺した子猫とはこういう話である。

猫好きの下村先生。ある日、生まれたばかりの子猫を拾ってきた。これはボブキャットではないからおとなしくて、かわいい。小さくて手のひらにのせるとまだ首がしっかりしていないらしく頭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.